

東アジアの哲学史上における西周思想の意義

卞 崇 道

(訳：于 臣)

1. 「哲学」の定訳は東西思想融合
 - (1)「哲学」用語の定訳
 - (2)西洋思想の中の「philosophy」
 - (3)中国思想の中の「士希賢」
2. 「哲学」という定訳の意義
3. グローバリゼーションの中の「哲学」

現在、中国と韓国の哲学分野において、西周という名を上げられると、誰でも彼の思想について多少は知っている。とりわけ中国では、日本の哲学思想を研究する学者は勿論、中国の哲学またはマルクス哲学を研究する人間は「哲学」という言葉が日本人の西周によって翻訳されたことを知っている。これは言語上の翻訳だけのことではなく、東アジア哲学史における大きな出来事である。ではこの出来事はいったいどのような意義を持っているのか。本報告はこの問題の解決を念頭に東アジアの哲学史上における西周思想の意義を解明したい。

1. 「哲学」の定訳は東西思想融合

(1)「哲学」用語の定訳

周知のように西周が「近代日本哲学の父」と称せられているのは、まず彼が「philosophy」という言葉を「哲学」に翻訳したからである。彼のこの業績は数多くの先行研究に捉えられているが、ここであらためて検討してみたい。

実は西周は審書調所で教鞭を執った間、西洋の自然科学及び社会科学に関する著作を耽読することを通して、「philosophy」という学科の存在を認識した。ただし、当時彼はこの学科に対する理解がまだ深くなかったため、カナや漢字でその発音しか表記していなかった。たとえば、彼は1861年「津田真道原稿本『性理論』の跋文」の中で「西土之学、伝之既百年余、至格物舎密地理器械等諸術（科）、間有窺其室者、特（独）至吾希哲学一科、

則未見其人矣、……今此論頗著其機軸、既有庠夫西哲而軼之者、不知異日西遊之後、將有何等大見識以發其蘊奧也」（大久保利謙編『西周全集』第一卷、p.13）と書いていた。明らかに西はここで「希哲学」という言葉で西洋の「philosophy」を記している。しかも彼は津田に対して、西欧に留学した後、この学科への理解をいっそう深めようと期待している。1862年（文久二年）西はオランダへ留学する前に友人の松岡隣次郎に送った手紙の中で留学志向を言及した際、宋代儒者の「性理の説」を引用し、「philosophy」を「西洋の性理学」、すなわち「ヒロソヒの学」と理解した。1862年6月に、西は留学の前に『西洋哲学史の講案断片』を著した。これは日本が西洋の哲学を研究する嚆矢とされている（麻生義輝『近世日本哲学史』近藤書店、1942年、pp.40-41）。ここで西は「philosophy」カタカナで「ヒロソヒ」と音訳し、そしてギリシア語の原義に依拠して「(ソクラテス—筆者注) ヒロソフルと名のりけるとそ、語の意は賢徳を愛する人といふことにて、所謂希賢の意と均しかるべしと存せらる、此ヒロソフルこそ希哲学の開基とも謂へき」（『西周全集』第一卷、p.16）と述べている。「希哲学」という訳語は中国周敦頤の「志希賢」からきた言葉で、賢人、哲人を求める意味であり、「知恵を愛する」原意には基本的に近い。

1862年9月、西は津田とともに長崎から出発してオランダへ留学し、翌年の6月に現地に到着した。西は指導教授のライデン大学のシモン・フィッセリング博士への手紙の中で自分の留学動機について、「列強との交際と国内政治法制の改善のために必要な、まだ我国で知られていない統計学、法学、経済学、政治学等の有用な学科が沢山ございます。……更に哲学と呼ばれる学問の領域をも訪れなければなりません。しかし、夙にデカルト、ヘーゲル、カント等によって樹立された教義は、私達の国が法律で認めようとする宗教思想とは別異のものと思います。それも学ぶのはとても困難だと存じます。しかし私はそれが私達の国の文化に貢献することを考え、その学問から何かを学びたいと思います」と述懐した（小泉仰『西周と欧米思想との出会い』、三嶺書房、1989年、pp.43-44）。ここからすれば、西は留学の前にすでに西洋の著作を通して「philosophy」に対する理解を深め、「哲学」という用語での表記を始めたのである。彼はオランダに留学した間、実用性のある学科のみならず、哲学をも真面目に勉強した。フィッセリングは哲学者ではないが、実証主義の哲学観念を持つ自由主義経済学者であり、西に大きな影響を与えた。しかも西は当時オランダの哲学界の大家であるオブゾーメル（G.W.Opzoomer 1821-1892）の著作と講義録を読んだ。オブゾーメルはミル、カントの功利主義と実証主義哲学に影響され、オランダ学界の主流に位置した人物である。こういった実証主義の習得は西のその後の理論的活動の基礎を成したのである。

西は1865年に帰国した後、フィッセリングなどの著作を翻訳するとともに、独自の理論を展開した。1870年（明治3年）、彼は『開題門』を発表し、「東土謂之儒、西洲謂之斐爾蘇比、皆明天道而立人極、其實一也」（『西周全集』第一卷、p.19）と論じた。ここで西は依然として漢字で「philosophy」を音訳し、それを東洋の儒学と同じレベルで捉えた。彼

は「付録」(1-6)の中で東西の学問に対する比較を通じて、儒学と哲学の区別を理解した。彼は朱子学の用語を引用したにもかかわらず、意味解釈において哲学に近づいていた。彼は『百学連環』(1870年)で実証主義の立場に基づいてルイス(G.H.Lewes)の『カントの科学哲学』をベースにして「統一科学」(哲学—筆者注)を構築しようとした。彼は「実理上(Positive Philosophy)哲学、此学の根元は佛人Auguste Comto及び英人Whewell及びJohn Stuart Millなり。ミルなる人は当今尚存命なるへし。此三人の以前は空理上の学なりしか、此ヲコストより初て実理上の学に至れり。其説にthree spaceとて、事物の開けは神、空、実の三つの場合を踏にありと言へり。当今のミル氏に至りて総ての学たるもの大に開くに及へり」(『西周全集』第四巻、p.181)と解釈している。そして西は『生性発蘊』(1871-1873年執筆)で「生性」を生理学と性理学として理解した。前者は「物理」を意味し、後者は「心理」の意味であるとした。しかもあらゆる学はこの二種類に分類できるという。西はこれらの科学の中からいわゆる「統一的科学」を探そうとする。ここで注目したいのは西がこの文章の中で何十回も「哲学」、「哲学者」、「哲学史」という用語を用いることである。そして『百一新論』(1866-1867年執筆、1874年出版公開)の出版となると、西は繰り返し、「philosophy」の訳語を推敲・比較した結果、「哲学」という定訳を創生して、世間に公表した。彼は「天道人道を論明して、兼て教の方法を立つるをヒロソヒー、訳して哲学と名け[る]」(『西周全集』第一巻、p.289)と述べた。その後、「哲学」という訳語は日本の思想界に認められ、遂に中国にも伝わり、中国の学者に受け入れられた(ただし、「哲学」という言葉は誰によって中国に導入され、何の書物に現れ出たのかがはっきり判らない)のである。それから、「哲学」という用語は現在まで中日両国によって使用されている。

(2) 西洋思想の中の「philosophy」

上述した「哲学」という訳語の選択過程から、西が「philosophy」を深く理解していることが判る。周知のように、「philosophy」は古代ギリシアに起源した古い学問であり、「愛知求知」(知を愛し、知を求め)、すなわち知識、並びに知恵を探求する学問である。西は『生性発蘊』(1871年)の中で「哲学原語、英フィロソフィ、佛フィロソフィー、希臘ノフィロ愛スル者、ソフォス賢ト云義ヨリ伝来シ、愛賢者ノ義ニテ其学ヲフィロソフィト云フ、周茂叔ノ所謂ル士希賢ノ意ナリ、後世ノ習用ニテ専ラ理ヲ講スル学ヲ指ス、理学理論ナト訳スルヲ直訳トスレドモ、他ニ紛ルコト多キ為メニ今哲学ト訳シ東洲ノ儒学ニ分ツ」(『西周全集』第一巻、p.31)と述べている。この引用文から、西が「philosophy」そのものの意義への了解を窺える。哲学の発展の流れからすれば、「philosophy」という学問の特徴は、第一に、「実用」の学問ではなく、すべての経験主義科学を超越し、形而上学を求める学問である。哲学の扱う問題は人間精神の力である。一般にあらゆる普通の科学は違う形、違うレベルにおいて「実用」的な役割を目指す。これに対して、哲学の本質は実用的科学ではない以上、より深遠な意義を持つ(葉秀山・王樹人著『西方哲学史』第一巻上篇、鳳

鳳出版社、2004年）。第二に、哲学は人間の現実世界から離れることなく、深いレベルにおいて、人間の活動に対して、マクロ的指導を与える。いわば、普通の科学が「知識」を重んじるのに対して、哲学は「知恵」を重視している。

上述した引用文からみれば、西は字源において西洋思想の中の「philosophy」の本義を捉えている。これに基づいて、西は次のように考えている。第一に、彼は「愛知求知」（知を愛し、知を求める）から出発して、宋学の始祖とされる周敦頤の『通書』に記してある「聖人は天に憧れ、賢人は聖人に憧れ、士人は賢人に憧れる」というフレーズを連想する。第二に、哲学が「理を講ずる学問」なので、「理学理論」と直訳できるが、儒学と区分するために「哲学」という定訳を決めなければならない。その背景において、まず西洋から伝来した新しい学術用語を翻訳する際、まず江戸幕府が公認する思想の朱子学の既存用語に合わせなければならない。というのは、当時の知識層はすでに朱子学を受け入れていたからである。次に、明治初期までずっと洋学と対抗する、支配の地位を占めた国学および生き残っている儒学とけじめをつける必要があるので、「哲学」という用語を採用するのがよい。第三に、西は「希哲学」から「希」を削った。その理由は西のいわゆる「後世ノ習用ニテ専ラ理ヲ講スル学ヲ指ス」という文章にある。ここの「後世ノ習用」は次のことを指す。まずアリストテレスは、「philosophia」が求めるものを「第一原理、原因に関する理論上の知識」（『形而上学』第一巻）と定義している。次にヘーゲルは『精神現象学』の序文（Vorrede）で「哲学」を「知を愛するという名称から脱却して現実上の知識を求める」と位置づけていた。こういった捉え方は「哲学」に対する理解を益々困難にした。西は正に西洋の「哲学」への理解及び学問の体系における哲学の位置づけを十分に認識した上で思い切り「希哲学」から「希」という文字を削ったのである（鹿島徹『全球的哲学意義』、中日哲学フォーラム報告、2006年）。

(3) 中国思想の中の「士希賢」

上述したように、西は宋代儒者の周敦頤の『通書』に示された「聖人は天に憧れ、賢人は聖人に憧れ、士人は賢人に憧れる」を参考にして、「philosophy」を「哲学」と訳した。では中国伝統思想の中で「哲学」という用語があるか。ない。しかし、中国では昔から「知人則哲」と「哲人」の表記がある。「哲」の意味は「智」或いは「大智」である（『尚書正義・皋陶謨』）。「哲人」は「賢智」を持つ人間を指す（『尚書正義・伊訓』）。孔子が死ぬ前に「泰山壞乎、梁柱摧乎！哲人萎乎！」（『史記・孔子世家』）と歌った。ここからすれば、「哲」という文字は中国文化の中で深遠な起源を持っているといえよう。

次に「学」という文字なら、周知のように、『論語』の中における「学びて時に之を習う」という文章にある。しかし、はじめて「学」という字を「学問」、「学説」並びに「学派」という意味で用いたのは、荘子の「百家之学、時或称而道之」（『莊子・天下篇』）という文である。

西は「philosophy」が「愛知求知」の学問であることを充分認識した上で、深い漢学の

素養に基づきながら、漢字の中の「哲」と「学」という文字を組み合わせ「philosophy」を翻訳した。彼の思考が深く、訳語が精練であるといえる。現代の中国哲学史学者の馮友蘭は1931年に出版された『中国哲学史（上）』の中で、中国古代のいわゆる「性と天道」及び「学の為し方」は西洋哲学の主張した宇宙論、人生論及び方法論と「大体相当している」と論じている。しかし、西は馮より57年前、すでに「東土謂之儒、西洲謂之斐爾蘇比、皆明天道而立人極、其實一也」と認識できたのである。

総じて言えば、西の「哲学」への翻訳の過程そのものは東西文化の出会い・融合の過程であり、「哲学」という言葉の定訳はこの過程の結晶である。西が「哲学」という訳語を選択したプロセスからすれば、彼は東西の思想について深い造詣を持っていたことが判る。最初のうちは、彼は欧米思想との「出会い」から自らの文化的蓄積を反省した。そしてこの出会いによって彼は西洋思想への理解を深め、最終的に堅実な漢学の素養を基にして「哲学」という訳語を創出したのである。この訳語の誕生は違う言語で哲学思想を翻訳すること自体が困難ではあるが、可能であることを示している。西は翻訳を通じて二つの転換を実現した。一つは言語上の転換である。すなわち「philosophy」を「哲学」に変換した。もう一つは意味上の転換である。つまり東アジア思想の中の「性理学」、「士希賢」を「philosophy」（「哲学」）に置き換えたのである。前者は表面の転換であるが、後者は深い意味の変革である。表面的にみれば、前者の変換作業はたやすく見えるが、実は翻訳者にとって相応する訳語の選定は簡単なことではない。後者の変革、すなわち深い意味での理解を抜きにしては適当な訳語を選ぶことはできない。

2. 「哲学」という定訳の意義

「哲学」という用語の定訳の意義がはるかに言語翻訳そのものを越えたのはいうまでもない。東アジアに導入された、人々に知られていない新たな「哲学」という学問が引き起こした反応はまずこれまでの東アジア思想自体を反省することである。これをベースにして伝統知識の近代的な転換を促すことになる。

日本にせよ、中国もしくは朝鮮半島にせよ、前近代の思想伝統は、皆儒学を核心として展開したのである。近代日本がいかに「哲学」の定訳を契機に儒学の哲学への転換を推し進めていたかについて高坂史朗氏は「儒学から哲学へ」（藤田正勝・卜崇道・高坂史朗編『東アジアと哲学』に所収。ナカニシヤ出版、2003年）という論文の中で詳しく論じている。高坂は、日本人の西によって翻訳された「philosophy」（「哲学」）が中国の思想家たちに受け入れられ、それをきっかけに中国人も自身の思惟方式を変革し始めたと述べている（『東アジアと哲学』p.221）。確かに「哲学」という言葉の衝撃を受けて、近現代中国における学問および思惟方式は転換期を迎えたのである。謝地坤は哲学領域において、中国が自分なりの哲学の伝統を持っているにもかかわらず、「哲学」という用語は中国本土で生まれた言葉ではなく、日本の哲学者である西周によって1874年、英語の「philosophy」を

訳したもので、中国の哲学学界に輸入されたものであるとしている。しかも彼は近現代の中国の哲学が中国の科学技術と同じく、西洋哲学の大きな影響をうけており、この影響は現代中国哲学の基本的特徴の一つになったと論じている（『西学東漸与現代中国哲学』）。すなわち、西洋の哲学に対する中国側の受容の歴史からみれば、西が訳した「哲学」という用語が伝来したからこそ、中国は哲学研究と哲学教育の序幕を切り落としたのである。

17世紀初頭、キリスト教が中国に伝わった際、宣教師を仲介にして中国思想は西洋思想と出会い始めた。R.ロックは宣教師の持ち帰った情報を通じて中国の地理と人文状況に注目し始めた。中国人も宣教師の紹介によってヨーロッパの哲学を理解してみようとしている（堀池信夫『中国哲学とヨーロッパの哲学者』明治書院、1996年）。

ただし、注目されたいのは、宣教師につけ、当時の中国の知識人につけ、「philosophy」に言及する時、西の方法と一致している。すなわち第一に、漢字で音訳することである。G. Sambiassoは『靈言蠹句』の中で「費録蘇非亜」という言葉を用いる。アレーニ（Aleni）は『西学凡』、ヴァニョーニ（Vagnoni）は『西学修身』、フルタード（Furtado）は『名理探』で皆「費録蘇非亜」という言葉で音訳した。嚴復は「斐洛蘇非」で表記した。第二に、「philosophy」の原意に合わせて中国伝統儒学の概念を通じて訳すことである。たとえば、「格物致理之学」、または「愛知学」という言葉で「philosophy」を訳した。清末、すなわち中国の近代に至り、識者は「philosophy」の含意についての理解を次第に深めていったにもかかわらず、表記において、前人のやり方を踏襲しており、せいぜい「格学」「性理之学」等の訳し方を付け加えただけである。西洋学に詳しい嚴復でさえ、その名著『天演論』（1898）の中で「斐洛蘇非訳言愛智」と記している。いわば、中国の学者は西のように真剣に「philosophy」の漢訳を考えていなかったのである。

1901年になってはじめて、王国維は『教育世界』という雑誌で「哲学」という用語を用いた。その後、嚴復、蔡元培、胡適などの学者は次第に「哲学」という言葉で「philosophy」を紹介し、この前の各種の漢訳の方法を止揚したのである。ここからみれば、西の訳した「哲学」という訳語は1874年以降の20年間にわたって、中国に伝わったことが窺える。呉光輝は、日本の教育界に哲学研究という現象が出現したことに清末の中国人も関心を示していると指摘した。顧厚焜の『日本新政考』（1888）や黄慶澄の『東遊日記』（1894）及び黄遵憲の『日本国志』（1895）はそれぞれ東京大学の「哲学科」または日本の「哲学会」に言及した（呉光輝「“哲学”概念的流变与近代中国的哲学啓蒙」、『明治哲学与東亜近代哲学的転型国際学術会議論文集』に所収。2005年8月）。すなわち、「哲学」という用語は中国人が日本明治維新の推し進めた近代化の経験を学ぶことに伴って、中国に紹介されたのである。当時の中国人が「philosophy」の原意をすでに理解していたが、日本人の訳語が適切であるとして採用したのである。

ところで、西の「哲学」という訳語の導入は日本の近代教育への学びと緊密に係っている。それゆえ、中国の教育の近代化が進むにつれて、「哲学」は重要な学科の一つとして

次第に人々に認知されたのである。1913年1月に教育部は『大学規程』を公布した際、明確に「哲学」を文系課程の一つに指定した。1914年、北京大学は「中国哲学門」を設立した。そして1919年哲学学部と改称した。これによって「哲学」は、近現代教育及び科学研究の枠組みのもとで専門的学科の一つとして正式に中国で成立したのである。しかも哲学教育を通じて、人智を開き、人々の思惟レベルを上げることは哲学の役割の一つとなった。なお、「哲学」が独立した学科として指定されることは、これまで哲学と儒学を同一視し、極端な場合、哲学が儒学に隷属していると理解した現状を打破した。そして、「哲学」によって儒学等の伝統思想を見直すなど、中国哲学について研究も始まるようになったのである。

中国は古代から「哲学」という用語がなく、しかも学術分類及び図書分類においても「哲学」という学科がない。こういう意味でいえば、哲学学科の独立は重要な意義を持っている。これについて、呉光輝は次のように指摘している。第一に、哲学は伝統儒学の「道徳仁芸」という綱領を排除し、現代学科体系の雛形を形成した。第二に、哲学の条目はもはや違う地域、違う思想の単純な統合ではなく、哲学自身の体系に依拠して決まったものである。第三に、哲学自身の体系は中国伝統の道徳体系と異なり、中国知識人の知的構造に大きな衝撃を与える。第四に、この新しい体系の成立は、哲学の普遍性を樹立した前提のもとで中国伝統思想が自らの存在価値を反省した上で、普遍性のある哲学の体系の中に入るように参照枠を提供した（同上、p.323）。呉のこの分析は大体において正しい。しかし、我々が西洋の衝撃に対応することに失敗したからこそ、物質世界、人類世界及び精神世界に対する西洋式の分類枠組をうけいれざるを得なくなったのである。人文の領域からみれば、哲学をはじめ、西洋式の学科の分類は受け入れられたのである。馮友蘭は19世紀末以来、中国哲学の発展が經学の時代を終え、近代化の新時代に歩みだしたと指摘した。

一方、「哲学」という学科の受け入れは上述した重要な意義を持っている反面、その後百余年の中国の学術研究に大なる困惑をもたらしたのである。中国の伝統を反省し、それを哲学化した最初の過程は、たいてい模倣から独創の段階までたどる。蔡元培は中国人のためにはじめて書かれた『中国哲学史大綱』（上巻、胡適著、1919年）の序文において、中国古代の学術が系統化しなかったことに触れて、次のように書いた。「我々は系統化するために古人の著作に依拠することができず、西洋人の哲学史に頼らざるをえない」と。また1923年、彼は『五十年来中国之哲学』という文章の中で、「ここ五十年来、しだいに欧州の哲学を輸入しているが、独創の哲学はまだ成り立っていない」（『蔡元培文集』巻5、哲学、台北錦綉出版事業股份有限公司、1995年、p.76）と指摘した。1930年代になると、馮友蘭、熊十力、張岱年、金岳霖、賀麟等は中国の伝統思想に対して、独自の視座によって整理し、西洋哲学と異なる中国哲学の特徴を提示し、哲学及び文化と融合しない道を歩もうとした。馮友蘭の「新理学」及び牟宗三の「新心学」を例として挙げられる。それゆえ、20世紀以来、中国の伝統的哲学は二つの転換を生じさせている。一つは「經学」から「哲学」への転換であり、中国哲学における近代的体勢づくりである。もう一つは普通の意味

での「哲学」から出発して、具体的な「中国哲学」へ発展し、後者の独特な精神価値及び具体的な普遍性を唱える。

総じて言えば、「哲学」が中国に導入され、とりわけマルクス主義哲学が中国に伝播された以降、中国人の思惟方式が大いに変化し、精神風貌も一新した。

3. グローバリゼーションの中の「哲学」

西周が「哲学」を訳した時代（1871）において、全世界で西洋化を特徴としたグローバリゼーションが進んでいたとすれば（欧米列強は文化を含め、片方で勢力を全世界に拡張する）、百二十余年の今日、新たに大規模な形をとり、内容がもっと豊かなグローバリゼーションが起きている（現在は経済的グローバリゼーション、政治の地域化、文化の多元化に向かっている）。近代における西洋の文化が東に進出すること自体には文化的侵略の意味が潜んでいるが、「哲学」は新しい学問として東アジアの人々に受け入れられ、これらの国々における知識の更新と文化転換のテコになったのである。ただし、今日になると、高度な水準に達した科学技術に基づいたグローバリゼーションの進展に伴って、「哲学」の機能は衰えつつ、人々に無視されてきた。

日本の実情から見れば、1992年から大学における教養課程の体系が崩れ始め、哲学課程及び哲学学科が多くの大学から消えつつある。90年代の中期になると、情報、福祉、メディアなどの新しい学科の成立に伴って、文学・歴史・哲学を機軸とした文科における大規模の組織調整が余儀なくされた。この情勢のもとで、「哲学」と学科はいくつかの有名な大学にしか残っていない。哲学は日本ではすでに制度上の保証を失い、滅亡の危機に直面している。

一方、中国は1990年代、市場経済体制に移行して以後、金銭への追及を価値判断の基準にした雰囲気全社会に蔓延し、教育の領域まで浸透した。大学では将来大金を稼げる実用性の専攻は受験生のトップの選択となり、哲学、歴史などの専攻は衰える一方である。この問題の解決を目指し、哲学学科は始めのうちに募集人数を減らしたり、哲学社会学科、哲学管理学学科と改称したりしたが、その後、哲学学部・学科を削る学校が出てきた。この趨勢に影響され、もともと中国のいくつかの大学には日本哲学専攻を設けてあり、当専攻の博士前期課程及び後期課程の学生を募集していたが、現在、日本哲学専攻を設置した大学は一箇所もない。哲学は実用性のない学科としてグローバリゼーションの中から忘却されている。

なお、専門の哲学者の研究領域において、近年来、中国の学術界では「中国哲学」の合法性について論争が起きている。すなわち、「中国哲学」という概念が成立できるかどうかについての議論である。中国古代には自らの義理の学があるが、この義理の学が扱っている問題は西洋哲学のそれとは必ずしも一致していない。では中国の歴史には、欧州の伝統から独立した「中国哲学」が存在しえるか。また我々が中国の伝統思想を解釈するにあ

たり、「哲学」は適当な方法であるか。そして「中国哲学」の概念及びその内容はどの程度まで適当に説明され、十分な理論的根拠を持ちえるのか。こういった「中国哲学」の合法性問題の出現は、「哲学」観念の導入によるもので、「西洋哲学」を判断の基準としているのである。では、我々は「西洋哲学」の「規」と「矩」を持って、「中国哲学」の「方」と「圓」を測ることができるか（或いは測るべきか）。正にこの意味において、「中国哲学」の合法性は一つの問題となったのである。この論争がきっかけで、人々は「哲学」、「中国哲学」及び「中西哲学」の異同、並びに現今の中国哲学が直面した課題について認識を深めた。中国と西洋の哲学からみれば、それぞれ各自の誕生・発育・発展の文化背景、社会環境、倫理道德、宗教信仰、価値観念、思惟方式、風俗習慣、言語文字があるので、哲学が語る「話題自身」及び「語り口」が異なってくる。換言すれば、中国と西洋哲学における宇宙、社会、人生、人心に対する認識と表現は大いに異なる。これによって、哲学の定義が異なるのはいうまでもなからう。

上述した現状に鑑み、識者はあらたに「哲学」の問題を考え、哲学自身への反省を始めている。其の一、哲学理論自体の中身は拡大すべきである。哲学は普遍性と超越性のある学問であり、「実用性」の学問ではない。しかし、哲学は「百学之学」（西周）として、必ず各科学の中に含まれ、「科学之科学」（西周）となる。それゆえ、各科学の発展に合わせて、現実の社会問題と結びつけながら、哲学研究を行うことが重要な課題である。とりわけ、東アジアの哲学者にとって、全面的に西洋の「philosophy」を理解し、形式上の「概念」の束縛から脱出し、広義の「哲学」観念を育て、世界範囲内に押し広め、「哲学」への理解に関する西洋中心主義を崩してこそ、異なる文化を跨ぐ哲学間の対話を真に促し、21世紀の東アジア人の哲学的智慧を発展させることができる。其の二、哲学は象牙の塔から歩き出し、民衆の日常生活の哲学にならなければならない。もし哲学が専門の哲学者の知識伝達に閉じこもり、哲学研究が推理と論証に止まるならば、哲学者は益々社会生活から敬遠され、哲学もだんだんその本意を喪失してしまう。西洋にせよ、東洋にせよ、哲学が探索する領域はすべて世界観と人生観に属し、ともに外在的または内在的超越性を持っている。しかし同時に、哲学は歴史、民族、時代の制限を受けているので、我々の生きている現時代の問題に直面し、対応しなければならない。其の三、哲学の普遍性と特殊性との関係をはっきり認識し、各民族自身の哲学の伝統を認め、尊重しなければならない。哲学の普遍性からいえば、違う国家と民族の哲学はもちろん、各個人の哲学さえありえる。そして哲学の特殊性からいえば、各国家、民族、個人の哲学はそれぞれ異なる。張岱年は1937年に『中国哲学大綱』の序論の中において、「類名」（類型）と「特例」との区別によって、哲学の普遍性と特殊性の問題を解決しようとした。彼は哲学への捉え方を二つにしている。一つは、西洋の哲学を「唯一の哲学のパタン」とする。西洋の哲学と異なる者は別の学問であり、哲学といえない。もう一つは、哲学を「一つの類型」とする。この場合、西洋の哲学はこの「類型」の中の一つの「特例」に過ぎない。そして西洋の哲学と類似点を持ち、

この類型に分類できるものはすべて哲学と呼べる。この認識からすれば、「昔中国にある宇宙、人生に関する思想理論は哲学と呼ぶことができ」る。すなわち、中国の思想理論もこの「類型」の一つの「特例」となれる（李存山「中国伝統哲学的特点」、『中国社会科学院院報』に所収。2006年8月31日）。この哲学への捉え方は中国哲学の「特殊性」を強調するのではなく、中国にも自分なりの哲学を持つということを説明している。この認識に基づけば、欧米のみならず、あらゆる民族は自分の哲学を持っている。ただし、その表しかたが異なるだけである（明治時代以前の日本には哲学があるかどうかはまだ未解決の問題である）。

グローバリゼーションの中で衰えつつある哲学の現状を反省し、西が「philosophy」を訳した際の哲学の意味、境遇およびその後百余年にわたる東アジアにおける哲学の発展過程を振り返れば、我々はあらためて先輩の西周に敬服し感謝しなければならない。彼が「哲学」を翻訳してこそ、東アジア諸国は真の哲学研究を始め、自分なりの哲学史の執筆に着手できるようになったのである。しかも、まさに百余年にわたる哲学研究の基礎があってこそ、我々東アジアの哲学者たちは、今日のように対話、交流を通じて、ともに21世紀の「東アジア哲学」を構築することができる。それゆえ、西周が東アジア近代哲学史上の偉人で、彼の思想の意義は東アジアの人々にあらためて認識され、高く評価されていると言っても過言ではないだろう。

付記

本稿は、2006年11月11日、島根県津和野町・森鷗外記念館で開催された「西周シンポジウム」の講演を公表するものである。

キーワード 哲学、伝統、グローバリゼーション

(BIAN Chongdao)